

昭和38年1月豪雪

昭和37(1962)年12月～38(1963)年2月

■気象の概要

昭和37年12月末から38年2月初めにかけて、日本列島は記録的な豪雪と異常低温に見舞われました。冬型の気圧配置が続く中、前線や小低気圧が日本海で発生して通過したため約1か月にわたり降雪が続き、その原因としては、北半球の偏西風の蛇行が異常に大きくなり、アメリカ、ヨーロッパ、東アジアの3方面で極地の寒気が大きく南下したためと言われています。

豪雪の中心は北陸地方を中心とした日本海側でしたが、通常は温暖で雪の少ない九州、四国地方の平野部でも30cm以上の積雪をみました。中国地方では日本海側の平野部で80cm以上、中国山地の山間部では軒並み2m以上の積雪となり、最深積雪が4m以上に達した所もありました。広島県芸北町樽床（現北広島町）では、1月1日に28cmだった積雪量が1月31日には4m64cm（最深は4m66cm）に達しています。

この豪雪の特徴としては、西高東低の気圧配置が1か月以上持続したため連日降雪があつて融雪の間がなく積雪の期間が長かったこと、平年に比べると3℃程度低い異常低温が続いたことが挙げられます。気象庁は広範囲に雪害、冷害をもたらした気象を「昭和38年1月豪雪」と命名しました。

■積雪・降雪量(昭和37年12月1日～昭和38年2月28日)

地点名	最深積雪		最大日降雪量		期間降雪量
	cm	月/日	cm	月/日	
鳥取	56	2/4	30	1/16	231
米子	80	2/4	35	1/16	315
松江	83	2/3	43	2/2	307
浜田	25	1/9	25	1/9	108
津山	32	1/8	22	1/8	118
広島	7	1/24	4	1/23	29
萩	19	1/26	17	2/4	97
下関	10	2/1	9	2/1	66

(気象庁HP:「災害をもたらした気象事例 昭和38年1月豪雪」より)

■中国地方山間部の最深積雪

地点	最深積雪	
	cm	月/日
鳥取	若桜	160 2/5
	日野	107 1/16
	阿毘縁	205 1/31
島根	赤名	225 1/22
	波佐	285 2/5
	匹見	245 2/5
岡山	恩原	245
	新庄	130
広島	高野	251 2/5
	布野	135 1/24
	樽床	466 2/4
	八幡	350 2/1
山口	徳佐	185

(各地方気象台:「昭和38年1月異常気象報告」等)

■昭和38年1月豪雪の被害

区分	単位	鳥取県	島根県	岡山県	広島県	山口県	全国	
人的被害	死者	人	5	33	3	7	7	228
	行方不明	〃					3	3
	負傷者	〃	11	53	4	22	11	356
住家被害	全壊	棟	31	204	3	64	55	753
	半壊	〃	18	455		73	118	982
	一部損壊	〃	105	1,094	35		270	4,288

(各県の数字は、地域防災計画資料、各地方気象台異常気象報告等による)

(全国値は防災白書による)

■被害の状況（一部要約して引用、住民の証言は原文通り）

○広島県吉和村（現廿日市市）

38年1月23日に1m20cmの積雪で村内が完全に埋まった感がありました。26日には雪害対策本部が役場に設置され、民間のブルドーザーが出動しましたが、2月初めまで入村できませんでした。県のブルドーザーによって8日には21日ぶりにバスが開通。営林署の職員や作業員が孤立する出来事もありました。（吉和村誌・第2集＝1985年）

・村民の証言

「三八豪雪にゃあ一m五〇cm一晩に降ったですけえね。前から降ったのと重なって大方二mが二月位はありました。生まれて始めてですね。うちのおばあさんが九三才になりますがそれも始めてじゃいんです」

「三月になっても道から家が見えん。除雪したのが両側にあるけえ」

「死人はなかったが、つぶれた家や家具がいごかんようになったのはずいぶんえっとあった」

「屋根も何も隠れて見えん。駄屋へ行くのも一応、雪の山（上）を越さにゃあいけん」

「あれからみんなが、広島へ出たんです。こがあに雪のえっと降る所に居らりゃあせんちゅうて、ドンドン出ちゃったけえ、吉和の人口も急にへり始めた」

「除雪には行政のおくれも目だった。山県郡、高田郡の方じゃあ県土木がブルドーザーでやったちゅうのに、（吉和では）スコップの除雪で、ブルが来たのはだい分後じゃった。一番後廻しになったわけよねえ」（吉和村誌・第2集）

○広島県芸北町（現北広島町）

もともと豪雪地帯でしたが、38年1月下旬には町役場で3m50cmを記録し、地域によっては5m50cmを記録しました。当時の町教育委員長は「現在の農村は昔と違い雪が積もっても経済活動は冬眠を許さない」と前置きし、これまでの雪害の中でも損失は計り知れず、「大災害」だったと断じていました。温暖とみられていた広島県では国による雪害対策が遅れをとっていたこともあり、2月にやっと芸北町は豪雪対策特別措置法に基づく豪雪地域の指定を受けました。広島県では異例の措置でした。

雪に閉ざされた町に救援物資を送る動きは1月下旬から始まりました。しかし米軍岩国基地に依頼したヘリコプターは悪天候でなかなか着地できず、加計高校芸北分校などに降りて一部成功しましたが、その後は飛行機による物資投下と除雪後のトラック輸送に切り替えました。救援の野菜が町内各地に配布されたのは1月末のことでした。

民家の屋根一つの雪下ろしに10日はかかりました。吹雪の中の作業であり、一度下ろしてもまた積もったためです。軒上2m以上の雪となると、下ろすだけでなく別の場所に移動させなければなりませんでした。地域の学校や寺社、寡婦や独居の人の家の除雪、橋梁の除雪も重なって町民は疲労困憊しました。

持ち合わせたブルドーザーの能力を超えた積雪でもありました。町内にあった機種では1日フル稼働しても



雪に埋もれた芸北町八幡地区／雪の上に電信柱だけがのぞいている
（いずれも芸北町誌）

1 kmの除雪がやっとで、夜に1 mも降ると毎朝通行不能になりました。このため広島県農業開発公社の20 t級ブル数台の応援を得て幹線道路は徐々に除雪が進みました。しかし、定期バスの運行はできず、芸北・加計間については緊急車両以外は2月下旬まで通行できませんでした。

学校は年度末を控えて長期休業できず、一部の中学校では有線放送を使って授業を行いました。町外の高校を目指す受験生はバスもマイカーも使えず、町の公用車である「ジープ」で送迎することもあったようです。

酪農家や養鶏農家は生乳や鶏卵の出荷ができず、加工・貯蔵にも限度があって廃棄を余儀なくされました。3月末になっても2 mの積雪があったため、稲作は苗床づくりに大きな影響が出ました。ブルの除雪では追いつかないため、農業改良普及所が「電熱育苗」を提案し、多くの農家を取り入れました。林業では20～30年生の成長期の植林が折損しました。

電話線や水力発電にも影響が出ました。町内の被害は死者1人、負傷者5人、家屋全壊13戸、半壊18戸、土蔵・納屋などの全壊9棟、半壊11棟などでしたが、それ以外にも建物の損害が多数ありました。

○広島県千代田町（現北広島町）

38年の1月は毎日雪が降り、25日には積雪量が1 mを超えました。建物の全半壊や一部損壊による被害は872戸、2669万円。農林畜産物の被害は麦・蔬菜・飼料作物を中心に3754万円に上り、被害総額は1億2467万円に及びました。役場は1月29日に雪害対策本部を設置し、2月23日には災害救助法の適用が通知されました。

当時、町は農業センターのブルドーザーで連日除雪を進めていましたが、積雪量の多さからはかどらず、各地区に橋梁と道路の除雪をするよう依頼しました。しかし橋梁は重量の関係もあり最小限の人数で作業するよう注意を促さなければなりませんでした（千代田町史・通史編⑤＝1998年）

○広島県加計町（現安芸太田町）

加計気象通報所が明治43年に記録を取り始めて以来、最大の降雪に見舞われ、山県郡は完全に雪に埋まりました。路線バスも国鉄可部線もストップし、民家の倒壊も起きていました。県は1月25日に加計に雪害対策連絡部を設けて職員を派遣。孤立している芸北町（現北広島町）八幡へ陸路で物資輸送を試みることにしました。

山県郡の被害総額は5億1885万円と推定。なおも未調査の被害、今後の雪崩被害などが加わると関係者は憂慮しています（加計町史・資料編3＝2004年、当時の広浜新聞の報道を含む）

○広島県戸河内町（現安芸太田町）

戸河内町の最高積雪量は松原地区の4 m 80 cmでした。農作物の被害は麦24 ha、菜種10 ha、レンゲ21 ha、蔬菜類21 haで計76 haに及びました。後にまとめられた建屋の被害は住宅半壊327戸、全半壊は住宅1、非住宅182、小学校11、中学校7、その他2で計537戸に及びました。被害総額は2252万円に達しました。



急患をヘリで運ぶ戸河内病院のスタッフ
1階が雪の下に埋もれた松原地区（いずれも戸河内町史・通史編⑤）

国特別名勝三段峡にも被害が出ました。橋の落下、栈道の損壊などがいたるところで起きました。当時の試算で復旧に1千万円かかるとみら

れていました。

また人身の被害は死者4人、負傷者2人。恐羅漢山で冬山訓練を終えて帰途にあった大竹市の会社員2人が雪崩に巻き込まれ、住民1人を含めて3人が遭難死した惨事もありました。今も内黒峠に碑があります。→コラム

町内では防災の機運が高まり、38年3月に「防災会議条例」「災害対策本部条例」が公布されたということです。(戸河内町史・通史編⑤=2001年)

○広島県布野村(現三次市)

38年1月16日の朝、布野村ではマイナス12・5℃を記録し、村民はかつてない寒さに震えあがりました。前年の年末から降り始め、明けて1月25日の横谷・室地区で2m50cm、上布野本町地区でも1m80cmと人の背丈を越す積雪になりました。屋根からおろした雪が軒先に達したため、二階から出入りしました。平屋家屋ではトンネルを掘って出入りしました。16日を過ぎると陰陽の道路は通行止めになり、31日まで布野村は陸の孤島になります。

雪の重みで家屋倒壊の危険もあり、12世帯が避難。中学校の屋内運動場が倒壊する事故もありました。住宅は全壊3戸、屋根の損壊119戸に達しました。人命に被害はありませんでしたが、村内の谷筋の小集落へ通じる道は長期にわたって不通になり、雪の重みで家屋がミシミシ音を立て、障子やふすまが用をなさないケースは多々あったそうです。

孤立した人々の不安は増すばかりで、過疎化に一層の弾みをつける結果になりました。(布野村史・通史編3=2002年)



布野村の積雪(布野村史・通史編3)

○広島県作木村(現三次市)

食糧不足は作木全域に及び、物資は鳴瀬まで背負い、そこから川舟で運んだといひます。道路は雪崩の危険にさらされ、丸木橋を架けて耕地を迂回するなど悪戦苦闘の二カ月を過ごしました。

作木第三小学校岡三淵分校の児童の作文は「一月末から二月にかけての雪は私どもが経験したことのない大雪で、岡三淵分校あたりで3メートル近く雪に埋もれました」「かし(菓子)も魚もなにも(かも)なくなってしまったので、家ではダイコンやカブをほったりしました。スコップで二メートル以上雪をほるのです。酒もタバコもありません。一日も晴れたことはありません」と書いています(作木村史=1990年・証言の原文は一部カタカナ)

○広島県高野町(現庄原市)

37年12月31日からの降雪はたちまち1mになり、広島市などから商用で訪れていた人たちの車が立ち往生しました。明けて38年1月1日は1m50cm、そのまま2月16日までの48日間にわたって連日降り続けました。深さは4m25cmに達し、食料品ばかりか薪やLPガスも



ラジオ中国(現中国放送)のヘリで運ばれる救急患者(広島県行政文書) / 当時の積雪のようす(提供・中村慎吾) = いずれも高野町

不足し、各商店の缶詰も底をつき、貯蔵していたダイコンなども掘り起こせません。急病人は県の応援を求めてヘリコプターで広島へ搬送。ブルドーザーによる県道の除雪は進まず、3月に入ってようやく車が通行できるようになりました。この年は気温も低く、平年と違って根雪が溶けないところへドカ雪が重なったとみられます。2月18日の最低気温マイナス24℃は高野町の観測史上二番目に低かったのです。積雪量もさることながら凍結も著しく「竹枯らしの厳冬」として人々の記憶に残っています。(高野町史＝2005年)

中国新聞編「中国山地」⑤(1968年)には高野町について次のような記述があります。「積雪が山仕事を奪い、それに長雨による冷害が重なって、その年(38年)の秋は三八〇人(町のあっせん分)が東京や広島方面に働きに出た。三九年は三〇〇人。四〇年は不況が響いて少し減ったが、町の総世帯九三七の三分の一近くが出かせぎに出た勘定だ」

○山口県徳地町(現山口市)

38年1月6日から連日降雪が続き、死者2人、負傷者3人、住家の全壊48戸、半壊52戸など被害総額1億300万円に上りました。中でも串中学校体育館の倒壊は特筆されます。(徳地町史＝1975年)

○岡山県新見市

積雪は千屋中学校で1月11～31日に10cm～12cm、新見第一中学校で1月3日～17日に2cm～3cmを記録しています。上市小学校の旧校舎の二分の一が倒壊し、凍結による水道管破裂が670戸ありました。(新見市史・通史編＝1991年)

○島根県弥栄村(現浜田市)

積雪が安城地区の平坦地で2m、山間部は3～5mに達しました。交通はもとより連絡の取れない集落もありました。集落の共同作業で除雪を行って家屋の全壊を防ぎ、危険な場合は避難命令を出して安全な場所に移動してもらい、給食の手配をしました。孤立した集落にはヘリコプターで物資を運びました。人的被害は負傷者数人で済みましたが、家屋の全壊半壊は多数発生しました。村は急遽300万円の予算措置を行いました。村誌は「当時の詳しい記録が残っていないのは遺憾である」としています。(弥栄村誌＝1980年)



2mを越す積雪を記録した
弥栄村長安本郷(弥栄村誌)

○島根県金城町(現浜田市)

昭和37年12月30日から38年3月上旬まで続く豪雪となった。今福地区では最大1m50cm、雲城地区では1m20cm、波佐地区では3m25cmを記録しました。1月下旬には国道186号や「浜田八重可部線」が途絶したといえます。(金城町史・第一巻＝2001年)

○島根県日原町(現津和野町)

37年年12月の終わりから平地でも70日間雪がありました。2人が雪崩で亡くなり、住家の全半壊が相次いだほか避難した集落は20地区(75世帯、延べ1385人)に上りました。小中学校の臨時休校は最大10日に及び、とりわけ雪の多い横道地区では児童生徒が長期間民泊しました。左鐙地区では2月18日まで、横道地区では3月9日まで路線バスが運休しました。

1月25日に発足した町雪害対策本部の町民からの聞き取りによると、生板の上にゴザを敷いて家族4人がしのいでいる。米はあるが味噌や醤油がなく電灯もない▽家屋が全壊し隣家に避難している▽駄屋が半壊したため牛を住家の土間で飼っている。牛を置いたまま避難できない▽懸樋が壊れて水がないため雪を溶かして飯を炊いていた。消防団が水を五升ずつ担いで届けている▽急病のため患者をそりに乗せ、道を固めて20人がかりで送り出した▽薪がなくなり雪輪を履いて枯れ木を取りに行っている▽78歳の老人以下5人が白で糲づきをして食べている。薪がなくなり生木の小枝を焚いている。救援隊が米、醤油、野菜、8日分の炭団を置いて帰った一といった深刻な状況でした。

左鐙地区では左鐙連合親和会が独自に雪害対策本部を設けて除雪などを急ぎました。県の雪害対策本部から小学校校庭に救援物資の投下もありました。(日原町史・近代㊦＝1979年、大庭良美編著)



日原町横道地区の積雪 (日原町史・近代㊦)

トピック

西中国山地・内黒峠の遭難碑 広島県安芸太田町(旧戸河内町)の内黒峠(標高990m)には三八豪雪の折に起きた遭難死亡事故の記念碑があります。桑原良敏著「西中国山地」(溪水社、1982年、97年復刊)によると、恐羅漢山周辺の山々へ冬季に入る場合、三段峽の谷筋を通る道は雪崩のため危険であり、内黒峠越えの道が唯一の入山路だといえます。三八豪雪では、その峠道周辺で3人が雪崩と寒気によって亡くなり、碑が建てられました。峠には登山家加藤武三の詩碑も建ち〈歩きにくい雪路を四時間／標高千米の内黒峠／その頂に立って／見はるかす北の山波…〉と刻まれています。西中国山地で積雪量の最も多い地域は八幡盆地から恐羅漢山にかけてのエリアでした。



内黒峠の「遭難碑」㊦と加藤武三の詩碑 (撮影・佐田尾信作、2022年)

トピック

三八豪雪の渦中で就任した町長 昭和38年2月に島根県匹見町(現益田市)の町長に初当選したのは益田市名誉市民の大谷武嘉(1912～2014年)です。「過疎」という言葉を早くから用いて国に足元の窮状を訴えたとされる人でした。4期16年の任を終えた大谷は著書「続過疎町長奮戦記」(自費出版、1979年)

の中で就任当時をこう回顧しています。

「…昭和三十七年十二月からの、のべつま（く）なしの雪雪雪、六千七百人の人びとは孤立と食糧不足におびえて、籠城のSOSを發し、閉じこめられた『白い牢獄』の毎日であった」「恐怖のなかで、食糧があやしくなってきた。米はあるが副食がない。魚がない。生野菜がない。食料品店の店先はどこもからっぽで、ミソがきれ、砂糖が底をつき、朝晩つけ物にご飯という家も出はじめた」

また中国新聞編「新中国山地」（未来社、1986年）にはこうあります。

『まあ結核に例えれば『かつ血』だね』。大谷さんは『三八豪雪』をこう表現した。（兆候に）驚いた患者は転地療養を始めた。治っても再発を恐れて帰って来ない。残ったものは途方にくれ、やがて元気なものまで不定愁訴に悩まされる」。豪雪は町民の離郷に拍車をかけたため、「患者代表」である大谷は医師の役目も果たさなければならない立場となり「処方箋」を書くのに試行錯誤します。

「新中国山地」取材班の一員だった島津邦弘はその後、「山里からの伝言」（溪水社、2012年）の取材で98歳の大谷に再会し、あらためて当時の記憶を引き出しています。「大谷さんが言う『外交姿勢の違い』は、のちのちまで過疎債、公共事業などの行政のさまざまな分野で、匹見の優位性を決定づけることになる。とはいうものの、『過疎対策のモルモット』となった匹見町が、過疎脱却を成し遂げたかどうかは別問題である」。匹見町は2004年、過疎対策に終始した町政を終え、益田市と合併しました。

その後、中国新聞連載「38豪雪 半世紀」（2013年）は3世帯が暮らす小虫集落から中心部に町が用意した集合住宅に70年に移転した人たちの現在をルポしています。大谷が各戸を説得に訪れ、時代の波で山仕事も細る中、住民はついに決断をしました。家を解体し、跡地にはスギを植えたとのこと。



旧匹見町長大谷武嘉の著書。表紙の人物は大谷

トピック

神田三亀男が詠んだ豪雪離村 民俗学者・歌人の神田三亀男（1922～2017年）は2001年に広島県加計町（現安芸太田町）安中（あんじゅう）という無人の集落を訪れています。太田川の支流丁川から3kmの急な坂道を上ると、荒涼たる棚田のあちこちに廃屋が点在していました。かつては16戸が田を耕し、木炭を出荷して生計を立てていましたが、木炭の需要が減ると同時期の「三八豪雪」にうちのめされました（神田「歌集 棚田荒涼」広島地域文化研究所＝2002年）。

42日間の連日の降雪で買い物にも出られず、麦飯と漬物だけで人々はしのぎました。やがて離郷者が相次ぎ、1970年に最後の戸が離れて廃村になったといいます。神田は同じ月に再訪し、廃屋の裏に洗い場の石が残されているのを見て「赤ぎれの手に水は冷たかっただろう」と思いをはせました。神田は離村した住民二人に心境を聞き「思い出安中」という文集を頂戴したと書き留めています。この地で神田は次の歌を詠んで

います。

「雪五尺」「豪雪」の文字書く板戸田植えの日なども書き込みてあり

また神田は同じ加計町の都賀尾も訪ねています。標高550mの地で15戸が田を耕し、炭を焼いていましたが、「三八豪雪」とイノシシや猿の跳梁跋扈によって離郷が止まらず、豪雪の翌年に村は消滅したとのことです。神田は「離村のさい植林した杉は生長がよく、在りし集落を包み込んで森と化している」と嘆きました。この地で神田は次の歌を詠んでいます。

昭和三十九年離郷と刻む小さき碑君が
定年後建てしふるさと



旧加計町都賀尾に残る離郷した人たちの碑④。
「棚田荒涼」に収録されている

トピック

酪農と三八豪雪

中国新聞編「中国山地」⑤（1968年）では豪雪で苦慮する酪農家の実態が指摘されています。「伸び悩む酪農」の項目では「山地部の酪農には輸送の問題が大きく立ちふさがる。三八年の豪雪。これでせつかく拡大の兆候をみせていた中国山地の酪農もいっぺんに打撃を受けた」と述べて「島根県大和村（現美郷町）の村之郷地区では三カ月も乳が出荷できなかつた」と例を挙げています。甕や桶を総動員し、そりで一部運んだが間に合いません。採算割れが生じた上に飼料も不足します。最後には牛が弱ってしまい。廃業する農家も出たということです。他の村でも同じ現場を見たと言っています。

一方で試練を乗り切った地域もあったとルポしています。山口県錦町向峠（現岩国市）では1m50cmの積雪で交通が止まったものの、大雪に備えて生乳の容器を確保し、保存方法を研究していました。このため2斗缶40本分の保存ができたというのです。この地区は昭和33年に一から乳牛を導入したばかり。「この成功は大きかったですなあ。いっぺんに自信がつかしました」と酪農家たちは記者に語っていました。

トピック

国鉄（現JR）三江線と三八豪雪

広島県北地方と島根県石見地方を結ぶ三江線（2018年廃線）は常に災害に悩まされ、三八豪雪もその一つでした。広島県安芸高田市歴史民俗博物館が17年に開催した企画展「さよなら三江線」には「豪雪に埋もれた船佐駅（安芸高田市高宮町）」と題した写真が出展されました。ここに映っているのは除雪のために出動した蒸気機関車。乗客を運んでいた気動車では馬力が弱いため援軍として走りました。

中国新聞の連載「さよなら三江線」（2018年）によると、三次機関区の機関助士だった人が三次駅から7km地点まで蒸気機関車を進めたが、それから先は動かなくなり、線路上では1m70cmある自分の体がすっぽり埋まりました。いったん作業を諦め、再開までに数日かかったそうです。船佐駅を蒸気機関車が通過する写真はその労苦を記録しているのかもしれない。



豪雪に埋もれた三江線船佐駅。除雪のため蒸気機関車が出動した（提供・吉野隆次）